人文フォーラム

37

2012.8

CONTENTS

巻頭言
翻訳についての雑感
人文学部長　安酸　敏眞……1
第９回日本文化演習報告／体験記……2
岩崎ゼミ　震災ボランティア報告 ― その１ ―……7
ゼミ室紹介
１部　日本文化学科　４年　追塩ゼミナール……10
卒業生通信
原点回帰、そして新たな挑戦　吉田　徹……12
大学院の窓
私の研究課題　歌人・木下利玄
―「白樺」から「日光」へ―　山田　航……13
研究、その足跡……14
人文学部第 16 期生　卒業研究題目一覧……17
編集後記……裏表紙

北海学園大学人文学部

巻頭言

翻訳についての雑感

人文学部長　**安酸　敏眞**

外国の思想や歴史や文学の研究にとって、翻訳という営みは本質的な意義を有している。「翻訳」という言葉は、西洋の単語の訳語として案出されたものではなく、古代中国の文献（隋書、経籍志四）のなかに見いだせる。その意味は「ある国の言葉を他の国の言葉になおすこと」である。英語でこれに相当するのは translation であるが、この語はラテン語の transfero に由来している。trans- は「向こうへ、彼方へ、超えて」、fero は「運ぶ」という意味なので、transfero とは「（ある所から他へ）移す、運ぶ」ことである。クリストファー（Christopher）という男子名が、「幼児キリストを肩に乗せて河を渡った」伝説上の大男クリストフォルス（Christophorus）に由来することはよく知られているが、このファー（-pher）あるいはフォルス（-phorus）のなかに、fero の原義が反映されている。fero の完了分詞は latus であり、translate はそれに由来する。それゆえ translate と transfer はもともと同一の起源を有している。

このように翻訳とは「ある言語を別の言語に移す」行為だが、この「移し替え」ないし「置き換え」作業には、さまざまな困難が潜んでおり、高度の知識や技法が必要となる。自国語で書かれたものでも、時代的な隔たりのある古い作品や文献資料を解釈する場合には、翻訳に類する困難と課題が存在する。そこに文献学や解釈学の出番がある。古来、読解作業が人文学的実践の根幹を形づくってきたが、それは精神の陶冶にも大いに資するものであった。「人間性」と呼ばれるものも、学校や大学での文献学的・解釈学的修練によって大きく成長する。古今東西を問わず、古典的文献の読解を通して得られる人文学的教養が、人間形成に寄与すると考えられてきたのは、理由のないことではない。

ところで、先般、須山静夫氏の遺作『クレバスに心せよ！　アメリカ文学、翻訳と誤訳』を読んで、翻訳の醍醐味を再認識した。著者は明治大学文学部で長く教鞭を執ったアメリカ文学者で、単行本の翻訳書は二十冊を下らない。おまけに自作小説でも幾つもの賞を受賞している。前任校の同僚として、謦咳に接する機会に恵まれたが、本当に偉い学者は偉ぶらない！　飄々としていながら、透徹した眼識を持つ本物の学者であった。

氏によれば、「創作の場合には、彫り出される像のもとは、当然のことながら、作者の頭のなかにある。翻訳の場合には、彫り出されるべき像は、訳者の頭のなかにあってはならない」。翻訳の完成時に取るべき姿は、原著のなかにひそんでいるからだ。たとえば氏は、フォークナーの『八月の光』の全体のイメージを新薬師寺の伐折羅（ばさら）大将という木像にたとえ、「翻訳者はこの像の持ついのちをそのまま観衆の前に、読者の前に、彫り出して見せなければならない。鑿を握る手もとを僅かに狂わせて、舌の先を僅かにでも削りすぎるなどはもってのほかだ」と述べている。「そもそも翻訳をしていて、どうもちょっとおかしいが、これでいいだろう、とか、こういう訳文になるよりほかないだろう、とか、そんなふうに感じたときには、そこは誤訳しているのだ、と思わなければいけない」。翻訳に誤訳は付き物だが、誤訳はしばしば先入観に起因する。そしてそれを打ち破ることがいかに難しいか、本書には数多の実例が示されている。氏は一五年もの歳月を費やして、メルヴィルの大作『クラレル』を翻訳されたが、そのために六〇の手習いでヘブル語を習得したほどのこだわりと努力の人であった。この書に示された「翻訳と誤読」の現実に触れると、みずからの学問が「日暮れて道遠し」の状態だと思わざるを得ない。

第９回日本文化演習

故きを温ね新しきを知る演習旅行

教務委員　**手塚　薫**

平成 23 年度の第９回日本文化演習は、平成 24 年２月 20 日（月）から 25 日（土）までの５泊６日間の日程で、奈良・京都・大阪方面で実施されました。参加者は１部29名、２部８名に留学生３名を加えた総勢 40 名の学生諸君でした。引率には、郡司淳、徳永良次、中川かず子、手塚薫の４名があたりました。陸路の渋滞もなく飛行機の運航もほぼ予定通りで、全期間を通じ大きなトラブル、病気、怪我もなく無事に研修を終えることができました。今回の研修日程は以下の通りです。

第１日　新千歳空港―関西空港―団体研修：大神神社・崇峻天皇陵
第２日　団体研修：大極殿・平城京跡資料館・平等院鳳凰堂・黄檗山萬福寺
第３日　自主研修
第４日　団体研修：丹後半島・伊根町―天橋立（元伊勢籠神社・傘松公園）
第５日　自主研修
第６日　団体研修：国立民族学博物館・万博記念公園―関西空港―新千歳空港

昨年の 12 月には、引率教員４名がそれぞれガイダンスと講義を担当し、現地で何をどのように理解すべきかの専門的な事前指導を行いました。これらを踏まえて受講生は自主研修時の詳細な計画を立て、事前レポートの形で提出しました。

昨年より参加人数が減ってバス１台におさまったとはいえ、待ちに待った自主研修日を含め、教科書でおなじみの日本史の重要な舞台となった名所・旧跡を自らの足で歩き、また日本の伝統的な美や風土に直に触れることによって、日本の歴史や文化についての認識をより深めることができたとの喜びの声が多く寄せられています。

とりわけ、最終日の国立民族学博物館の講堂や展示室では、同館の齋藤玲子氏から長時間にわたり充実した内容の講演や解説を賜りました。熱心に聴き入り、また、自らの疑問点を自分の言葉で表明する学生たちの姿からは、健やかな成長ぶりも窺うことができました。

なお、学生レポートについては、研修旅行後の記憶が鮮明なうちに学生全員が提出したレポートを全て掲載した『日本文化演習報告書』からの転載であるとともに、掲載写真等の一部変更を行っていることを申し添えます。

平城宮跡でガイドの説明に耳を傾ける

極楽浄土に思いを馳せて（平等院鳳凰堂）

新選組の故郷“八木邸”を訪ねて

1部　日本文化学科3年
海藤　梓

壬生―現在は京都市中京区に位置するこの地は、幕末にはかの新選組が拠点地として活躍していた地でもある。自主研修一日目である2月22日、私は自ら“新選組を巡る旅”と称し、この地に足を踏み入れてみた。本当は旅の一部始終を書き綴りたいものではあるが、今回はページの制限上、あえて新選組初期屯所“八木邸”のみを取り上げて紹介したい。

大宮駅を下車し、商店街を地図通りに5分ほど歩く。そしてコンビニ脇の小路地を右に折れた時である。細い路地の両面を昔ながらの日本家屋や小さな寺社が囲う―まさしく幕末の京都を絵に描いたような光景が眼前に広がった。かつて新選組の隊士達もこの光景の中を駆けずり回っていたのだろう、そんな思いをはせながら私も八木邸に向けて歩を進めていく。新選組の定番の幟があちこちに見え始めた頃だろう、やっと目的地が眼前に現る。

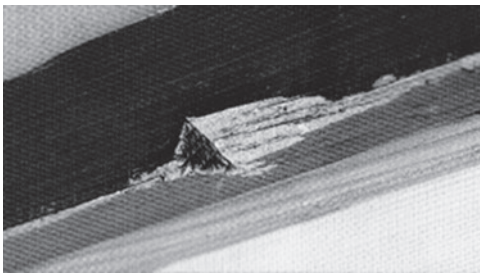
ここ八木邸は、清川八郎率いる浪士組が将軍上洛警護の目的で江戸から京に上った際、宿舎として使われた建物のうちの一つである。その後ここを割り当てられた近藤勇や芹沢鴨ら13名が、主張の違いからこの浪士隊に反逆し、京に残留して会津藩お預かり“新選組”を結成、この場所をそのまま屯所として使用したという話は有名である。またここでは初代局長の一人である芹沢鴨の暗殺が行われ、現在よく知られている近藤勇一人を局長とする形の新選組が生まれた場所でもある。それに加え作家子母澤寛は、自身の数多い新選組取材の中で特にここ八木邸で長時間を割き、幕末当時の当主だった八木源之丞の次男為三郎の話を聞くことで、現在では第一級資料ともなった『新選組遺聞』（1929年）を書き上げたのである。つまり八木邸は、新選組誕生の地として二重三重に意味を持つ。

八木邸の中庭　近藤と芹沢は派閥が大きくなる前はここで刀を合わせるなど親交を深めたらしい

長屋門の前に立ってみると、立派な与力窓や出格子窓などが開放されており、当時の面影をそのまま感じ取ることができる。なるほどこの醸し出す風格は、ここ八木家の中祖がかの有名な越前朝倉家である由縁か―ふと右に目を向けてみると、近藤ら在京メンバーが八木邸右門柱に「松平肥後守御預新選組宿」の表札を掲げたというエピソード通りに、現在でも“新選組”の看板が掲げられており、ほのかに心が躍る。

早速入館料を払い、公開されている母屋の奥座敷へ。ここの奥座敷は主に水戸派である芹沢鴨・平山五郎・新見錦・平間重助・野口健二などが使用したといわれている（ちなみに近藤・土方らは現在新設の茶屋があるあたりに建てられていた別宅を使用していたらしい）。入って一番に感じたのは、急激な床冷えの寒さである。話によると、八木邸の長屋門及び母屋は京都市指定有形文化財に指定されているため、その保存ゆえから断熱材や暖房を入れる事ができないらしい。ということはこの寒さは幕末から続いているものなのか、新選組の隊士達もこの環境の中で生活していたのか、そう考えるとまたこれも貴重な体験といえる。造りとしては、西端に土間を奥まで通じて、土間に沿って居間を3室ずつ2列に配した構造となっている。3部屋はそれぞれ襖で区切られるようになっており、襖を取り払うと部屋を繋げることができる。これはおそらく夏場家全体の風通しをよくするために用いられた、日本独自の家屋の特徴だろう。「昔はこの辺は農村地帯であったうえに京都は北の方が高くなっているから、ここから二条城や五山の送り火を見ることができたんですよ」。説明を受け私も中庭の方へ眼を向けてみたが、悲しいかな、現在では乱立するコンクリートの建物ゆえにその情景を楽しむことはできなかった。またこの辺りは、昔は南部家などといった郷士豪農宅がたくさん集まっていたのだが、現在ではその形を保っているのはこの八木邸だけらしく、なんともいえない寂しいものを感じた。

話は芹沢鴨ら水戸一派の暗殺へと移っていく。ここの部分は私も事前に何度か本で読んではいたが、やはりその現地で話を聞くのとでは臨場感もはなはだ異なる。「ここの天井をご覧



現在も同邸の鴨居にしっかりと残る芹沢・平間暗殺時の刀傷

下さい。その時の血痕が未だに残っています」。それが惨殺された芹沢のものかはたまた首をはねられた平山のものかはわからなかったが、見上げた天井には確かにそれが存在し、恐ろしいまでのリアリティを放っていた。

帰りに母屋の隣にある茶屋でおいしいお茶とお茶菓子を頂き、お礼を言うついでにもう一つの新選組屯所であった隣の“前川家”について尋ねてみた。「前川さんの方は個人宅ですからうちみたいに公開はしてないんですが…あそこの奥、土蔵が見えるでしょう？　あそこがかの有名な古高俊太郎への拷問が行われた場所です」。古高俊太郎の拷問とは、尊攘派との噂が囁かれた枡屋の喜右衛門（＝古高俊太郎）を新選組が捕縛、副長土方が五寸釘責めの拷問にかけたところ、「御所に火を放って天皇を長州に送り、守護職をはじめ反長州要人を殺害する」という計画を明かしたというものである。そしてこの事件は、翌日に起きた新選組の名を大きく広めることになった事件、“池田屋事件”へと繋がっていくのである。現在京の街に沈む静かな土蔵からは、そのような殺伐とした歴史があったことなど感じさせない。ただしやはりこの地には、司馬遼太郎が自身のエッセイの中で言うように「現地に行かなければわからない実感」が存在することを教えられた。

みんぱくに見るリアル

1部　日本文化学科３年
三村　知世

古都「京都」を中心として関西地方を巡った今回の日本文化演習では、百聞は一見に如かずという言葉を痛いほど思い知らされた。普段、教室やインターネットから得られる情報は、あくまで他者による経験に過ぎない。文化というものは、自らが触れて、その目で見て、肌で感じて、嗅いで、聞いて、五感をフルに使ってこそ初めて自分の中に取り込むことができるのだと感じた。

そういった意味で感銘を受けたのが、最後に訪れた国立民族学博物館（以下みんぱく）である。私の短い人生の中で、博物館という物は見るだけのものとして定義されていた。しかし、このみんぱくでは、可能な限り展示物に触れて良いと言う。衝撃であった。

広い展示室の中には、11のテーマに分けられた民族資料がいっぱいに置かれている。しかし、それらにはガラスの檻が設けられておらず、楽器であれば鳴らし、家であれば入る等、本来その物の持っている役割を再現することができるのである。それは、現地に赴き、文化を取り入れるということの疑似体験であったと私は思う。擬似体験という点では、札幌市厚別区にある「北海道開拓の村」が私の中での基準であったが、屋外に村を再現し、ミニチュアの様な感覚で存在するそれと違い、実際に使用されていた資料を多く揃えたみんぱくは、展示の為に並べられながらも、まるでその空間を切り取ってきたかの様に錯覚させてくれるのである。そこに感じるのは、京都の古い寺院に足を踏み入れた時の様なリアルさであった。

では、なぜその様に感じるのであろう。みんぱくの展示物の、いったいどこに私はリアルさを感じるのだろうか。

それは恐らく、みんぱくの資料がみな、良い意味で不格好のまま展示されているからだと思う。

例えば、次頁上の写真はオセアニアの展示場に置かれた、クック諸島民の教会衣装であるが、明らかにマネキンとサイズが合っていないのである。衣装の方がかなり大きく、特に腹まわりなど、生地が余ってしまっている。

また、次頁の写真は日本の展示場に置かれた縄飾りであるが、結び目が歪んでいるのである。この写真はできるだけ正面から撮影したものだが、右側の輪が完全に縦になってしまっている。

例に上げた二つの写真は、かなり不格好だ。しかし、それが良いのである。民族学の資料として、「第三者の手が加わってしまってはならない」という原則はもちろんだが、この生地の余りから、結び目の歪みから、私たちは想像をすることが出来るのである。

生地に余りがあるという事は、クック諸島の人々はこのマネキンよりもかなり恰幅が良いのだろう。それは、日本人との食生活の違いだろ

うか。では、実際にクック諸島の人々はどの様な体型なのだろうか。縄飾りが歪んでいるというのは、日本の古い絵ではあまり見られない。では、あれらの絵にはある程度の脚色がなされているのか。虚実皮膜の境目はどこにあるのだろう。といった風に、この不格好さから私たちはこれらが本来置かれていた場所の生活を感じ取り、想像し、展示の為に作られた物からは学べないリアルさを感じることができるのではないだろうか。もちろん、中には複製や展示の為に作られたものが在るのも理解しているが、多くの本物の中で、主張しすぎずに、想像を補うことが出来る様に置かれている為、そこで覚めてしまったりはしない。

みんぱくは、あの空間の中に世界中の生活を詰め込んでいる。世界の昔から今を凝縮するには狭すぎる空間であるが、人間が歩いて回るには広大な場所である。今回は二時間という短い時間での見学であったので、軽く一周しか出来なかったが、それでも沢山の疑問を生むには十分な時間であった。

こうしてレポートを書きながら、持ち帰った資料を整理している間にも、また新たな疑問がいくつか生まれつつある。民族学というものに今まで興味は無かったが、今回の見学でかなり面白いと感じた。是非ともまた機会を作り、今度は研究の為に、みんぱくを訪れてみたいと思う。

「古都」京都の「今」
―日本文化と西洋文化の共存―

2部　日本文化学科3年
井上　優太

2月の末、日本文化演習に参加して関西方面に行くこととなった。団体研修では奈良県の大神神社や第10代天皇の古墳などをはじめとし、京都府の平等院鳳凰堂、黄檗山萬福寺へ行ったり23日には丹後地方にて舟屋群を見学し、古くから日本の名所として知られる天橋立も見物した。最終日には大阪府にある国立民族学博物館で世界中の様々な文化に触れ、その多様さや日本文化との違いを改めて実感させられた。

さて、この研修旅行の要となるのが22日と24日、この2日間の自主研修であるが計画を立てたまでは良かったものの、思った通りに事を運ばせることが出来ず、反省の多い2日間であったと思う。

自主研修の主なテーマは日本文化と西洋文化が京都でどう共存しているのか、という点である。「古都」と呼ばれる京都だけに、清水寺や金閣寺などの日本の建築物や文化財などに目が行きがちだが、それらだけが京都の姿ではないだろうと思い、日本の歴史的建造物だけでなく、京都の中に形として残された西洋の文化や建造物も巡ることにした。そうすることで日本文化と西洋文化の差異を考えたり、その二つの文化が今の日本にどう影響を与えているのかという事を探ろうとした。そこで22日、朝の9時に嵐山のさが人形の家へと入ろうとしたのだが、冬季休業中により断念せざるを得なくなったので急きょ予定を変更し、天龍寺へと向かった。はじめは法堂天井の雲龍図を鑑賞しようと思ったが、水曜日は公開日でなかったので見ることはできなかった。だが大方丈の前を通りがかった時、法堂のものとは違った雲龍図が展示されていた。その龍は力強くこちらを睨んでいるような錯覚に陥らせ、とても威圧感のある作

品であった。大方丈の雲龍図は明治期に活躍した画伯によって描かれたものであり、損傷が激しいために毎年2月にのみ展示されている貴重な作品であると説明を受け、少しだけ得したような気分になった。また曹源池庭園も見事な景観で、約700年前に作られた当時からその面影を残しており日本で最初に史跡・特別名勝指定されたと知り、その変わらない景色を眺めているうちに700年前にタイムスリップしたような感覚に陥ってしまった。

次に西洋文化に触れるべく、京都嵐山オルゴール博物館に足を運んだ。アンティークな雰囲気の建物に入ると優しく、どこか懐かしさが込み上げてくるような、オルゴールのメロディーに迎えられた。2階に上がると、シリンダーオルゴールやディスクオルゴールなどが並んでおり、しばしその音色に耳を傾けていた。なかでも特に興味を引いたのが西洋のからくり人形、オートマタである。ねじを巻くとオルゴールを奏でながら人形が動くという代物で、その動きはゆっくりとした感じではあったがまるで生きている人間のようにリアルであった。「画家『ピエール』」という作品を例にとると、単に筆を運ぶだけでなく瞬きをしたり肩をすくめたりなど敢えて無駄な動きを取り入れることで、人間らしさを醸し出している。

博物館員の方曰く、元々は懐中時計のアラーム機能として考案されたオルゴールであったが、エジソンの蓄音器がまだ発明されていなかった時代では、いつでも好きな時に音楽を聴けるという点が注目され、次第に大きくなっていったのだそうだ。さらにからくり人形にオルゴールを組み込むことにより、自動的に動く人形として誕生したオートマタは、どこまで本物の人間に近づけるか、ということがその国の科学技術の高さを示す水準とされ、競って作られるようになったという。その他にもオートマタには黒人や貴婦人、道化師をモデルにした作品があり、その当時の服飾文化や時代背景を風刺したものをうかがい知ることもできるデザインとなっていた。

科学技術の進歩により、ぜんまい式のオートマタが作られることは少なくなってしまい、現代ではオートマタ作家も激減している。スイスのフランソワ・ジュノもその数少ない職人のうちの一人だ。彼の作品「世紀末の月」は昔ながらの方法や仕組みで作られており、ゆったりと、そして機械仕掛けとは思えない柔らかな動きで見る者を驚かせた。しかし、全てのオートマタはオルゴールが止まると同時に、動きを止めて人形に戻ってしまう。再びねじを回してもらうその時まで、じっと待ち続けるオートマタ達のその姿は健気で、どこか儚げに見えた。

自主研修の2日目、24日はまず詩仙堂に行ってみた。バスに揺られて一乗寺下がり松町で下車、歩いて10分のところに建っていた。都から離れたそこは、とても静かで不思議と心が落ち着く場所であった。天井を見上げながら建物の中を歩いていると、36人の詩人の肖像画が四方の壁に飾られていることに気づいた。元々は凹凸窠と呼ばれていたが、建物の中に掲げられた中国の詩人たちの肖像画から「詩仙堂」という名が来ているのだと初めて知り、納得がいった。また、敷地内の庭園は人の手が加えられたと感じさせない、神秘的な雰囲気が漂う風景であった。さらに庭園内に歩を進めると、どこからかカコーン、と心地よい音がした。音のする方へ行ってみると、そこには添水があり、絶えることなく一定のリズムを刻んでいた。

今回の自主研修では予定通りに行動できなかったこともあり、とても時間が足りないように感じた。また京都を訪れる機会があればもっとじっくり名所や史跡を観察したいと思う。

岩崎ゼミ

震災ボランティア報告

―その１―

東日本大震災の発生から１年４カ月が過ぎようとしている。石巻では被災した人々のほとんどはまだ仮設住宅で暮らしているが、半壊した住宅を修理して戻ろうとする変化も見られる。岩崎ゼミの学生たちは昨年 10 月から石巻市において、ボランティア活動を継続している。毎月３人の学生が教員と共に石巻へ行き、「マニュアルのない１週間」を過ごしてくる。報告その１ではボランティア活動を始めた 2011 年 10 月から 2012 年１月までの活動を学生たちの言葉とともに紹介する。この時期は「いっしょにあそぼう」というボランティア活動が中心であり、仮設住宅の集会所で子供たちと楽しく遊んだ。12 月には仮設住宅のお母さんたちが企画したクリスマス・パーティーの手伝いをするなど、子供たちとの思いでは尽きない。講義に合わせて教員が札幌へ帰った後、学生たちは看護師のボランティア団体であるキャンナスの一員として活動した。その内容は多様であるが、仮設住宅や在宅の高齢者の健康チェックに同伴したり、そのデータのパソコン入力、使われなかった支援物資の整理など、学生に出来る作業をこなしてきた。そして 2012 年１月には学生たちが企画・運営して「震災ボランティア報告会」を学内で行った。岩崎ゼミの学生たちは今年度も継続してボランティア活動を行っているが、今後人文フォーラムの紙面でそれらの様子を報告して行きたい。

（岩崎まさみ）

クリスマス会に集まった子供たち

仮設住宅の訪問をする学生たち

ボランティア 10 月便

小野寺裕太、木村宵子、阿部早友美

私達の被災地ボランティアでの主な活動内容は、石巻市の水押野球場にある仮設住宅の集会場で子供達と遊ぶことでした。下は三歳くらいの子から上は小学校中学年くらいの子までと、年齢層に幅のある子供達と遊ぶにはどうしたら良いのかと最初は試行錯誤していましたが、日がたつにつれ、どのような遊びをしたら子供達が楽しんでくれるのかが段々と分かるようになり、最終的には私達の企画で子供達がとても喜んでくれたと思います。被災地にはまだ一度しか訪れていませんが、時間に自由のある学生のうちにまた足を運んでみたいと考えています。

シャボン玉あそび

石巻に届いた支援物資には、たくさんの種類のものがありました。大量のクレヨンや、絵本。ボディシャンプーなどの日用品。海外からもティーパックなどが届けられていました。私はその中でも、大量に余された女性用下着に驚きました。いっぱいに詰め込まれたダンボールが数箱あり、その中の下着をサイズごとに整頓する作業を 2 時間以上かけて行いました。支援物資というものは送り手の想いとは裏腹に、使われずに残ってしまう物資に対して整理や処分に多くの場所やお金がかかります。阪神淡路大震災の際にも物資を処分するのに巨額のお金が必要だったといいます。私たちは本当の意味で被災地のために、必要なものを必要な分だけ適切に届けることが必要だと知ることができました。

支援物資の整理

ボランティア 11 月便

小田桃子、小林千陽美、綱島花波

岩崎ゼミの震災ボランティア 11 月組は仮設住宅で子供たちと遊ぶほかに、使われなかった支援物資の整理をしました。たくさんの物資の中に、いろいろな国から寄せられたメッセージカード付きの靴下を発見しました。世界各国の方々から応援メッセージが描かれた靴下が集まっていたということは被災者側にも知られていないのだと思うと、とても悲しくなりました。

メッセージ付の靴下

牡鹿半島の寄磯浜という小さな集落には、海岸近くに 8 軒ほど家があり、また、高台にも 30 軒ほど家があった。海岸からすぐのところにある家々は全て流され家の土台しか残っていなかった。ある 1 軒の家の土台にはお花が供えてありました。私達が帰ろうとした時に一人の中年男性がやってきて、その花の前で膝をつき泣いていました。あの光景が今も頭から離れない。

南三陸町は、人が住んでいたことさえ感じさせないほど平地が続き、瓦礫やコンクリートの土台しか残っていない状態だった。建物の上に

は、津波で流されてきたバスやトラックが乗っかったままだったり、道路が陥没していたり、家があったであろう場所に献花されてあったり、三階建ての建物が横倒れになっていた。そこには、東北から遠く離れた北海道に住んでいる私達には想像もつかない風景が広がっていた。

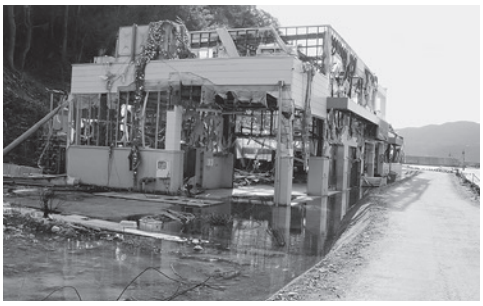
今回、石巻市での子供達との交流ボランティアをするにあたって必要不可欠だったのが、現地で活動するボランティアスタッフ（キャンナス）の方々の助けでした。支援物資の整理や被災地の方々との交流など、私達ができる範囲のボランティアの場を準備してくださり、また子供達と遊ぶ際もアドバイスをしてくださいました。私は、キャンナスの方々との共同生活の中で、私達よりも早くに出かけ、遅くに戻ってくる彼らの姿を見て、現地に住み込みで活動するボランティアの方々は休む暇もなく、ボランティアスタッフが足りていないのが現状なのだと感じました。

キャンナスの皆さん

ボランティア 12 月便

松井啓介、伊藤和美、小野寺裕太

被災地を訪れて最も強く感じたのは、復興していくための需要に対して、支援金や支援する人材が足りていないということである。被災地復興のためには地域産業の再生が不可欠であるにもかかわらず、支援が細部まで行き届いていない。例えば、小さな漁港などは、国からの支援は最小限のものにとどまっているため、自力での復興を余儀なくされている。また、直接的な復興のためだけでなく、ボランティア団体の人材・資金不足も深刻になっている。被災地が経済的に完全に復興するのにあと何年、何十年もかかるといわれているが、復興の大前提として必要なお金と人手が足りていない。



小さな漁港

私は 10 日間のボランティアで、たくさんの人の優しさに触れました。主な活動として子供達との交流がありましたが、ビーズ遊びをした時には、お母さんのために一生懸命にアクセサリーを作る子の姿や、なかなか皆の輪に入れない子を気遣う子供達の姿を見ることができました。別れの日には「気を付けて帰ってね」「風邪ひかないでね」と私達を気遣う子供達の優しさに思わず涙がでました。また、現地で活動するボランティアスタッフ（キャンナス）の方々の助けで、支援物資の整理や被災地の方々との交流など、私達ができる範囲のボランティアの場を準備してくださり、忙しい中、子供達と遊ぶ際のアドバイスもしてくださいました。今回のこのボランティアでたくさんの人と関わり、優しさに触れ、人は人に支えられて生きているのだと感じました。被災地で一生懸命に生きている人、被災地の復興に向けてボランティアを続けている人がいるということを多くの人が忘れないように、私にもできることを続けていきたいと思いました。

皆でケーキを飾りました

ゼミ室紹介

1部　日本文化学科　4年
追塩ゼミ

ゼミ指導教員から

私のゼミは古代・中世の説話集を素材に、当時の人々のものの考え方や信仰・生活その他もろもろのことを関連資料を調べながら検討しています。説話集を素材にしているのはゼミ生の多様な関心を満たすのに適当である、という理由からです。現在の人数は３年７人、４年 10 人となっています。

ゼミは卒業研究につながっていくものですから、ゼミを通じて資料の調べ方、史料の読み方と留意点などを身につけ、問題関心を持つことの重要性を認識してもらうことを主としています。そのことにより探究心や問題解決能力といった資質が育成されることも願っています。

ゼミは４校目に関しては３年・４年合同で、５校目は４年のみで卒研演習を行っています。４年生は年に２回卒研に関する発表を行うことを義務付けられていますが、３年生も可能な限りそれに参加し卒論作成過程の一端を認識してもらっています。以上のことから、３・４年生それぞれにゼミについての感想などを書いてもらうのが望ましいのですが、スペースの制約と３年は所属してまだ間もないという理由から、以下の文は４年生に限定しました。　（追塩千尋）

学生から（あいうえお順）

荒関　友輔

追塩ゼミでは３年生と４年生が合同で参加し、意見を交わし合うスタイルをとっています。私が３年生の時の教材は『古事談』でした。実際に報告を担当してみると、『古事談』に関連する多くの資料に接することが出来、そこから貴重な情報を知ることが出来ました。また、他の人と意見を交えることで、書物だけでは得られない情報を得ることが出来ました。

伊藤　柊

文献・資料の読み方、使い方が養われるゼミだと思います。何を見て何を考えるか、何を使えば求める情報が手に入るか、などは一年間で結構わかってきたように感じています。いわゆる「目のつけ所」が良くなってきたような……。説話の読み方が解るゼミでもあり、そうした類の資料も面白く読めるようになったのはゼミに所属しての大きな収穫であると思っています。

柏崎　一平

追塩ゼミは主に古代・中世の歴史について、文献を読みながら学習しています。そのため、

文献や資料を読む力や資料の探し方などの実践的な力が身につくゼミです。先生は歴史だけではなく文化や宗教全般にも詳しく、どのようなテーマにでも広く対応してくれるので安心できるゼミだと思います。

兼子　舞子

『古事談』という教材を渡され、人物や用語を調べ、関連資料を調査する、という作業は考えていたよりも難しく思いました。図書館に参考文献がないなどの困った事態にも遭いましたが、そういう場合の対処法も勉強になり、取り組む中で楽しいと感じるようになってきました。調べていくうちに自分の興味ある分野に走ってしまい、本来の調査が疎かになりそうなこともありました。古文の解釈は結構難しく、間違えることも多かったのですが、それは結局は自分のためになることでした。ゼミの作業は卒論のテーマを考える上で役立つことが多く、所属してよかったと思っています。

後藤　久美子

ゼミに所属して一年経ちましたが、他のゼミよりも確実に得るものが多く、自分自身も成長できていると感じております。ゼミで読み進めている『古事談』の発表において訳や用語の解説だけではなく、関連資料の提示や自己が関心を抱いた点を掘り下げるといった作業により、知識ばかりではなく興味・関心が広がります。また、発表内容についての先生からのアドバイスはいつも得るものが多く、とても勉強になっております。今後もあらゆるものに興味を持ち、自分で調べるという作業を怠らず知識などを増やしていきたいと思っています。

酒井　悠司

ゼミでは説話を読んで関連する資料と照らし合わせながら、説話の選者の意図を読み取りまとめる作業を行っています。資料は古文・漢文なので扱いは正直大変ですが、現代人とは異なる当時の人々の価値観を知ったときなどは感動を覚えますし、その点でとてもやりがいがあります。先生から関連知識や情報の提供も多々ありますし、また調べ方もしっかり身につきます。古代・中世の歴史に興味のある方にはオススメのゼミと思います。

寺尾　瞳

他のゼミの人との交流が余り無いため適切な比較はできませんが、調べる文献の量は多い方なのではないかと思います。ただ、多いとはいっても調べるべき資料や文献は予め提示されていますので、調べ方に戸惑うことはありません。また、提示されている文献を調べていくうちに、文献資料の調べ方が身につくと思っています。ゼミに所属するに際して日本史の知識があったほうが良いですし、古文の知識がないと厳しいと思います（自分の経験からです）。

宮本　瑶子

私がこのゼミで学んだことは、史資料の見方や調べ方です。教材の『古事談』を読み、登場人物や関連事項を調べ訳す、という作業を通じて史料の読み方の留意点を学ぶとともに、自己が素材に対して興味関心を持つことの重要さや楽しさを知ることが出来ました。私はこれまで積極的に発言や質問をすることはなかったのですが、このゼミに入って疑問に思ったことを少しずつですが怖れずに発言できるようになりました。これも先生が些細なことでもいいから質問・発言してください、とおっしゃって下さったからだと思っています。

卒業生通信

原点回帰、そして新たな挑戦

2部　日本文化学科　平成23年度卒業生（小野寺ゼミ）
吉田　徹（てつ）

私は25歳の時に大学に入学した。高校卒業後すぐに就職し、数回転職をしたが主に技術系の会社で働いていた。大学で学ぼうとした理由は、自分の中の新しい分野を開拓したくなったからだ。今まで経験したことの無い人文学の分野で、新しい視点で物事を見ることは非常に面白かった。

卒業論文の作成にあたり、昨年の11月下旬に九州の宮崎県高千穂町に赴いてきた。高千穂町は『古事記』の天孫降臨伝説の舞台となった地とされる場所であり、様々な日本神話が語り継がれている場所である。高千穂町は深い渓谷の中にあり、商業施設や公的機関のある中心部を囲むように幾つかの集落が点在している。中心部を抜け集落に向かうと、あたり一面に棚田が形成されており、山岳部での農業の特徴が表れている。今回の旅で高千穂町の町を歩き、地元の方々に話を聞き大変貴重な体験が出来た。日本人としての自己意識が改めて認識でき、これから生きていく上での基礎の一部になった。

卒業後、仲間と畜産業を主とした会社を起業。始めて約2カ月過ぎたが、未だに不安と期待を抱きつつ多忙な日々を過ごしている。私にとって畜産業は経験したことのない分野であり、自分の知識の無さを痛感している。畜産業や農業について知識を集めている段階であるが、生き物を扱う仕事は知れば知るほど面白い。養豚に関して言うなら、与える飼料と肥育の環境によって肉質が大きく変わってくる。新しい肥育方法を考えれば、独自のブランド豚が作れる可能性があり、海外の安価な輸入肉と競えることが出来ると考える。

畜舎の前にて

高千穂町の棚田

近年、国内では畜産業に限らず農業全体の「跡継ぎ」に関わる問題がある。さらに海外からの食料の輸入依存も多くなり、食料自給率の低下と農業の担い手不足が懸念されている。私見ではあるが、これからの農業は大きく変わっていくと予想している。私たちもその中で、あらゆる可能性を模索しながら、食料生産の担い手として社会に貢献していきたい。

これから始める畜産業と大学で学んできた日本文化は、ほとんど関係性がないといえる。しかしどの分野に限らず、既成概念を逸脱し新たな分野で挑戦していくことは、急速に変化している今の時代の中で非常に重要であると考える。以後も今までの経験と大学生活で得た新たな視点で、さらに自分なりの見聞を広めていきたい。

大学院の窓

私の研究課題

歌人・木下利玄
―「白樺」から「日光」へ―

文学研究科　日本文化専攻　修士課程１年　**山田　航**

今春から田中綾准教授のもとで、日本近代文学を専攻しております。研究テーマは木下利玄という、明治から大正にかけて活躍した歌人。志賀直哉や武者小路実篤とともに活躍した「白樺派」の文人として著名です。代表歌「街をゆき子供の傍を通る時蜜柑の香せり冬がまた来る」はとりわけ有名であり、教科書などで一度は目にしたことがあるのではないでしょうか。

私は文学部ではなく、法学部出身です。専攻は西洋政治思想史でした。26 歳のときに角川短歌賞と現代短歌評論賞というのを受賞し、それ以後歌人として新聞や雑誌などに短歌や評論、エッセイなど書かせていただける機会を得ています。ちなみに田中先生は現代短歌評論賞受賞者の先輩でもあります。

もともと当初の構想としては 1923（大正 12 年）に創刊された歌誌「日光」を研究しようと考えていました。北原白秋、木下利玄、前田夕暮といった歌人たちが参画した歌誌です。当時の歌壇は、リアリズムを主題に据えたアララギ派が席巻しつつありました。そのムーブメントに対抗すべく、耽美派の白秋や口語自由律の夕暮などの非アララギ系歌人が大同団結して創刊されたものでした。古泉千樫、釈迢空などアララギを脱退して参加したメンバーもいました。とりわけ原阿佐緒と石原純は、純粋な文学性ばかりではなく、私的な事情からアララギを飛び出して「日光」に参加するに至りました。

「日光」というこの壮大な挑戦がなぜ勃興し、そしてなぜ短期間で潰えたのか。同人たちの豊かな個性も含めて、実に興味深いです。しかし「日光」は研究者がほとんどおらず、歌誌の復刊もされていないために研究は困難とのことにより、同人の一人である木下利玄に絞って研究する構想となりました。

「白樺」も「日光」も同人たちの非常にユニークな思想に基づいて誕生した文芸誌でした。独自の作風を保ったままその二誌を飄々と泳ぎ切っていた利玄は、その穏やかな作風によらずしたたかな人物だったのではないかと想像します。「日光」創刊号の看板同人として利玄が抜擢されたのは、文学者同士の相互交流が活発だった大正文壇において彼が決して地味な存在ではなかったことの証左でしょう。惜しいことに 40 歳の若さで病没してしまうのですが、利玄の重ねた歌業は今もなお振り返られるべき価値を有しています。

また、現代短歌も研究の対象としています。エッセイストとしても高い人気を持つ当代随一の歌人・穂村弘の、初の研究者となることをめざしています。穂村氏との共著で『世界中が夕焼け　穂村弘の短歌の秘密』（新潮社）という評論書を出版しておりますので、書店で見かけたら手に取っていただけると幸いです。

■学会・研究発表

佐藤　貴史

「レオ・シュトラウスとシオニズム」３月、第19回政治哲学研究会、早稲田大学

「ローゼンツヴァイクの〈新しい思考〉とスピノザ」５月、科研「近現代哲学の虚軸としてのスピノザ」第８回研究会（スピノザ協会、京都ユダヤ思想学会との共催）、大阪大学

須田　一弘

「誰を食べるか、誰が食べるか：パプアニューギニアとトンガの食事情からみえること」2012年度海外学術調査フォーラム　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所　2012年６月30日

田中　　綾

「〈3・11〉の語り方――短歌と大震災」３月、日本社会文学会北海道ブロック例会、北海学園大学

常見　信代

「中世初期の教会組織―総括と今後の方向」、５月12日、中世ブリテン史研究会、上智大学

テレングト・アイトル

「日中における修辞学の初期の受容について」（The Early Reception of Rhetoric from the West via Japan to China）（2012年５月12日）「東アジア文化交渉学会」、第四回国際学術年会、韓国ソウル、高麗大学。発表原稿：『第４回国際学術年会資料集』高麗大学日本研究センター、03G27-31頁

■著書・論文など

岩崎まさみ

「日本における北の海の捕鯨」『捕鯨の文化人類学』岸上伸啓（編）成山堂、172-186頁

上野　誠治

「ゲルマン祖語における閉鎖音の変化：ヴェルネルの法則再考」３月、『新人文主義の位相―基礎的課題―』、北海学園学術研究助成共同研究報告書、161-176頁

追塩　千尋

「日本仏教通史の枠組み―『新アジア仏教史』日本編刊行に寄せて―」北海学園大学『人文論集』51、1-27頁、2012年３月

「中世における神の機能」平成22・23年度北海学園学術研究助成共同研究報告書『新人文主義の位相―基礎的課題―』所収、145-159頁、2012年３月

大谷　通順

（著書）『ほあんいん！　中国語〈基礎篇〉』（共著）４月、郁文堂

「骨牌博戯『同棋』――清末民初におけるその社会的･文化的位置づけ（上）」３月、『人文論集』第51号、北海学園大学人文学会、29-60頁

小野寺靜子

「万葉集巻八・一五六二～一五六三歌をめぐる問題」７月『北海学園大学人文論集』第52号、北海学園大学人文学部、（一)-(十二）ページ

佐藤　貴史

「マケドニクス〔フランツ･ローゼンツヴァイク〕『北西と南東』への『訳者解題』」４月、『思想』第1056号、岩波書店、225-231頁

柴田　　崇

「ハイダーとギブソンのメディウム概念」６月、『生態心理学研究』第５巻、日本生態心理学会、15-28頁

テレングト・アイトル

「三島文学のグローバル化――あるいはその研究と展望」『人文論集』第51号、北海学園大学人文学部、2012年３月（61-74頁）。

「人文学教育における文学の意味について」『新人文主義の位相――基礎的課題――』北海学園学術研究助成共同研究報告、2012年３月、81-120頁

中川かず子

「日本人学生と留学生の異文化交流―異文化接触、協働的活動を通した大学教育への適応と意識変容―」４月、『留学交流』４月号、日本学生支援機構、1-10頁

濱(浜)　忠雄

「ハイチから『新人文主義』を考える」３月､『新人文主義の位相――基礎的課題』（平成22・

23 年度北海学園学術研究助成共同研究報告書）、北海学園大学人文学部、23-59 頁

船岡　　誠
「円爾禅とその評価」3 月、平成 22・23 年度北海学園学術研究助成共同研究報告書『新人文主義の位相―基礎的課題―』、121-143 頁

安酸　敏眞
「新しい人文学の学知を求めて―人文学部の改革私案―」、3 月、『新人文主義の位相―基礎的課題―』（平成 22・23 年度北海学園大学学術助成・共同研究報告書）、3-22 頁

■講演など
大石　和久
シンポジウム司会・コーディネーター「北海道と映像――映画・ミュージアム・テレビ――」3 月 10 日、北海道芸術学会第 18 回例会、北海道立近代美術館

常見　信代
「イギリス史の現場から」、1 月 12 日、北海道高等学校教育研究会 地歴･公民科部会､白石高校

中川かず子
「日本語の副詞と教授法について」3 月 1 日、2 日、雲南大学、雲南師範大学（中国雲南省昆明市）

■評論・エッセイなど
追塩　千尋
（書評）舩田淳一『神仏と儀礼の中世』『史学雑誌』121-2、91-98 頁、2012 年 2 月

大石　和久
「北海道と映画の関係性を愉しむ」（和田由美氏との対談）4 月 20 日、『KAI［カイ］』vol.15、ノーザンクロス社

佐藤　貴史
（書評）「本質の無力さ――フランツ・ローゼンツヴァイク『健康な悟性と病的な悟性』――」3 月、『思想』第 1055 号、岩波書店、129-135 頁

田中　　綾
（書評）古谷鏡子著『命ひとつが自由にて』（影書房）、『図書新聞』6 月 23 日
（書評）『歌群合同歌集第 2 集』3 月、「歌群」127 号、歌群短歌会
（選評）「第 13 回三浦綾子作文賞」1 月、同賞入選作品集、三浦綾子記念文学館
（書誌）菱川善夫著作集 10『自伝的スケッチ』2 月、沖積舎
（鼎談）「作品季評」前半・後半、『短歌研究』4 月号・5 月号、短歌研究社
（解説）村上敬明著『たましひをはこぶ舟』6 月、短歌研究社
（コラム）「書棚から歌を」『北海道新聞』 1 月 8 日◇ 1 月 15 日◇ 1 月 22 日◇ 1 月 29 日◇ 2 月 5 日◇ 2 月 12 日◇ 2 月 19 日◇ 2 月 26 日　◇ 3 月 4 日　◇ 3 月 11 日◇ 3 月 18 日◇ 3 月 25 日◇ 4 月 1 日◇ 4 月 8 日◇ 4 月 15 日◇ 4 月 22 日◇ 4 月 29 日◇ 5 月 6 日◇ 5 月 13 日◇ 5 月 20 日◇ 5 月 27 日◇ 6 月 3 日◇ 6 月 10 日◇ 6 月 17 日

安酸　敏眞
（書評）梅津順一『ヴェーバーとピューリタニズム』（新教出版社、2010 年）、平成 23 年 9 月、『日本の神学』（日本基督教学会）第 50 号、156-160 頁

■翻訳
佐藤　貴史
ヨハネス・ヴァイス「カリスマ――社会学の境界線上で」、「ヴァイス教授の応答」『現代社会におけるポスト合理性の問題――マックス・ヴェーバーの遺したもの』（土方透編著）3 月、聖学院大学出版会、67-100 頁、141-154 頁
マケドニクス〔フランツ･ローゼンツヴァイク〕「北西と南東」4 月、『思想』第 1056 号、岩波書店、231-236 頁

■研究費
上野　誠治
平成 23 年度北海学園学術研究助成・共同研究（代表：船岡誠）「新人文主義の位相―基礎的課題―（継続）」（研究分担者）

追塩　千尋
平成 23 年度北海学園学術研究助成・共同研究（代表：船岡誠）「新人文主義の位相―基礎的課題―（継続）」（研究分担者）

佐藤　貴史
青山学院大学総合研究所 2012 年度研究プロジェクト（代表：西谷幸介）「キリスト教大学の学問体系論の研究」（研究分担者・青山学院大学総合研究所客員研究員）

柴田　　崇
平成 24 年度北海学園大学学術研究助成・一般研究、「サイボーグ技術に関する思想史的研究」（研究代表者）

須田　一弘
科学研究費補助金基盤（B）　海外学術「半島マレーシアにおける自然・社会的変化に対する狩猟採集民の適応戦略の多様性の解明（研究代表者：口蔵幸雄・岐阜大学・地域科学部・教授）」研究分担者
科学研究費補助金基盤（B）　海外学術「パプアニューギニアにおける熱帯林の環境変化とギデラ地域住民の狩猟採集耕作生活（研究代表者：河辺俊雄・高崎経済大学・地域政策学部・教授）」研究分担者
科学研究費補助金基盤（B）海外学術「バングラデシュにおける地下水砒素汚染と児童生徒の知的機能・社会生活能力」（研究代表者：稲岡司・佐賀大学・農学部・教授）研究分担者

常見　信代
平成 24 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）、研究代表者（常見　信代）、研究課題「中世のブリテン諸島における教会組織の再検討」

テレングト・アイトル
平成 23 年度北海学園学術研究助成・共同研究（代表：船岡誠）「新人文主義の位相―基礎的課題―（継続）」（研究分担者）

濱（浜）　忠雄
平成 23 年度北海学園学術研究助成・共同研究（代表：船岡誠）「新人文主義の位相―基礎的課題―（継続）」（研究分担者）

船岡　　誠
平成 22・23 年度北海学園学術研究助成・共同研究「新人文主義の位相―基礎的課題―」、研究代表

安酸　敏眞
科学研究費補助金（研究成果公開促進費〈学術図書〉）（研究代表者安酸敏眞）「歴史と解釈学―《ベルリン精神》の系譜学―」
科学研究費補助金基盤研究（B）（研究代表者高橋義文）「ラインホールド・ニーバーとその現代的意義に関する包括的研究」（研究分担者）
平成 23 年度北海学園学術研究助成・共同研究（代表：船岡誠）「新人文主義の位相―基礎的課題―（継続）」（研究分担者）

■その他
岩崎まさみ
「アイヌ文化と沙流川照合開発」『第 26 回北方民族文化シンポジュウム報告書』、31-36 頁

大谷　通順
第 11 回「漢語橋」世界大学生中国語スピーチコンテスト北海道予選大会審査員、6 月、中華人民共和国駐札幌総合領事館・札幌大学孔子学院主催、札幌大学

テレングト・アイトル
2012 年 2 月 19 日から 2 月 28 日まで、科学研究費補助金・基盤研究（A）「『東洋』的価値観の許容臨界：『異質』な思想・芸術造形の国際的受容と拒絶」の計画に基づき、ギリシャ、アテネの遺跡・博物館などを調査した。

中川かず子
2 月 29 日～ 3 月 6 日まで雲南師範大学、同文理学院大学、雲南大学を訪問、教育・研究交流を行なった。
3 月 14 日～ 3 月 18 日まで日韓共同研究（北海学園大学、大田大学校）のため訪韓〈大田市、ソウル市〉
北海道学生競技ダンス八種目選手権大会開催、大会会長、6 月 17 日、北海道大学第二体育館

〈日本文化学科〉

・指導教員　菅　泰雄

赤　石　みなみ：政治と「言葉の力」の関係性について
近　江　竹　志：国語教育における敬語指導―学校教育での敬語が、生活の潤滑油になるためには―
杉　原　麻　里：漫才におけるツッコミについて
大　門　　桃：個性のある国語辞典―国語辞典を役立てるために知っておきたいこと―
長　岡　紗弥佳：移動に類する動詞《入》《込》《出》の用法と比較
橋　本　琢　実：あいさつ言葉の変遷―「おはよう」「お疲れ」を巡って―
土　生　尚　孝：日本語における婉曲表現使用の背景
矢　部　成　美：食ことばとしてのオノマトペの役割
山　﨑　憂　佑：アスキーアートと顔文字から考えるインターネットコミュニケーション
木　下　　周：２ちゃんねる語というもの―意味と使用場所の拡大―
林　　万　里：若者における北海道方言の実態～滝上町と札幌市の調査を通して～

・指導教員　徳永良次

伊　藤　理　紗：六条御息所考―物の怪か、心の鬼か―
尾　崎　哲　子：兎と月に関する日本人的思考についての考察
北　俣　里　奈：若者語の登場＝日本語の乱れなのか？―正しい日本語の在り方とは―
木　戸　羽　純：源氏物語の“心”表現について
木　村　心　香：現代の「コミュニケーション能力」に求められているものとは
小　嶋　　唯：“漱石の造語”とよばれる造語たち―「肩こり」は『門』から生まれた！？―
髙　原　奈　月：新語・流行語について―現代新語・流行語の傾向―
林　　香　里：光源氏と女たち―光源氏に愛された女性で幸せだったのは誰か―
平　松　　遥：源氏物語における「おもしろし」と「をかし」について
藤　田　典　子：『源氏物語』の擬音語・擬態語―その特徴と紫式部の意図―
松　橋　夏　海：日本と中国の「龍」の性格の差異について
渡　邉　香　織：パリジェンヌがおしゃれだと注目される理由―ファッション色彩とパリの街の景観からの考察―
渡　部　小　春：和歌と恋の関連性―『源氏物語』の末摘花の和歌を通して―
山　田　さとみ：和菓子―歴史と色―
岩　澤　達　也：「電気クラゲ」とは何か？―「電気クラゲ」から考える名称の用例と名付けの考察―
大　野　祐　貴：現代浦島太郎の研究―浦島太郎の歴史から―
澤　田　有　里：私たちと数字の「3」―「3」から何をイメージしますか？―

・指導教員　中川かず子

井　上　みのり：『グリム童話』と『白雪姫』比較
江　川　大　地：オリンピック金メダリストとポジティブ感情
太　田　早　紀：ファッション用語に見られる外来語の特徴―意味のずれを中心に―
大　宅　麻　恵：音楽雑誌における外来語使用の変遷
鈴　木　晴　香：「日本語」と「和語」の違いについて―英語と中国語の辞典の名称を通じて―
鴇　田　祐　哉：若者たちが使うことば―現代の若者ことばに対する若者たちの意識―
中　村　悠里子：宮沢賢治の日本人らしさ
西　島　　宙：日本文化における色彩語彙とその在り方
林　　あゆ美：日本人論について―戦後 50、60、70 年代の思想を再考する―
宮　野　里　紗：ハロルド・E・パーマーに学ぶ日本の英語教育
森　岡　祐　樹：日本人が議論できない理由の考察とその改善策の提示―義務教育におけるディベート科の導入―
阿　部　　光：漫画『クレヨンしんちゃん』から見る親族呼称の日韓比較

・指導教員　大石和久

森　越　亮　太：声優―放送の歴史からみる声優の活動―
伊　澤　志　穂：物言わぬ表現の効果―ソフィア・コッポラ、岩井俊二の類似性―
大　橋　祐　依：寓話としての『千と千尋の神隠し』―『千と千尋の神隠し』が伝えたかったこと―
奥　塚　亜紗美：日本の女性映画監督の歴史と魅力
金　田　朋　子：クリスマス映画―奇跡の可能性―
小　林　萌　美：文学作品の映画化―『不思議の国のアリス』の比較―
坂　井　　恵：矢口史靖監督の『ウォーターボーイズ』『スウィングガールズ』『ハッピーフライト』の魅力について
佐　藤　翔　平：映画コンテンツ産業の現在と未来
瀧　本　知　佳：映画の中の現代家族―崩壊と再生―
信　本　早　織：映画『ハンニバル』研究―殺人鬼ハンニバル・レクターと FBI 捜査官クラリス・スターリングの関係を巡って―
深　津　智　子：『たそがれ清兵衛』山田洋次監督が本格時代劇に挑戦した理由とは？
宮　達　友　里：細田守監督作品からみる作家性―細田節を探る―
村　井　裕　子：CG 映画の魅力―なぜ CG は使われるのか―
米　谷　久美子：ディズニー映画におけるプリンセス物語
岡　村　とも美：黒澤明監督作品『生きる』研究
高　橋　　舞：演劇と映画の違い
高　橋　良　輔：映画『魔女の宅急便』の現実感とその魅力
田　澤　　陽：蜷川幸雄の魅力
長谷川　　曹：男鹿和雄の背景画の魅力

・指導教員　須田一弘

市　田　亜　蘭：イスラム教と食生活
茨　木　亮　輔：日本とフランスの文化的差異―庭園―
岩　本　　伸：右の文化、左の文化―左右に見られる価値観とその認識の図式―
折　戸　由　希：システムとしての妖怪
菊　地　明日美：奥尻島および奥尻島における漁業について
佐　川　健　明：ヘヴィメタルとは何か
定　久　元　基：ストリートダンスについて
下　山　伸　明：刑事ドラマ―時代で見る背景と比較―
髙　島　　唯：これからの図書館身近な「知」の施設を知る
二　木　満理奈：自然界のスカベンジャー―カラスの生態と人間との共存問題―
廣　橋　あさぎ：日本の葬儀と死生観について要旨
八重樫　　亨：原子力発電の今後について
山　崎　佑　華：癒し文化は人々の心を癒すのか
佐　藤　雄　規：幽霊の図像イメージの形成と巷間への影響
生　野　雄　寛：縁起―日本における縁起の形態―
高　橋　　栞：婚姻について
成　澤　朱　梨：日本女性における顔隠しの文化
渡　邊　麻友美：公共図書館と大学図書館での行動観察

・指導教員　郡司　淳

菅　原　泰　嗣：陸軍特別大演習と北海道民
小　林　加　奈：時代を創った百姓―自給自足社会から消費経済社会へ―
塚　田　ゆかり：近代北海道における国民意識の形成
福　田　美　紀：変わりゆくキモノ―着るキモノから、魅せるキモノへ―
宮　下　愛　可：音響機器による私たちの音楽
小　田　　克：環太平洋戦略的経済連携協定とマスメディア―国難の時代に求められるその役割―
半　谷　圭　介：特攻責任論
日　根　康　太：小説『磯路』
松　橋　裕　介：親日国家台湾からの問い
山　口　拓　郎：葬送儀礼に見る死への態度―西欧の死生観研究からのアプローチ―

・指導教員　テレングト・アイトル

安　宍　麻衣子：『人魚の海』における「信ずる力の勝利」について
阿　部　由季奈：宮沢賢治『銀河鉄道の夜』における「ほんとうの幸福とは何か」という問いが持つ意味について
金　山　千　春：宮澤賢治『貝の火』　貝の火のあやうさ
金　子　　翠：『春琴抄』における「失明」の役割―「春琴」と「佐助」の絆―
黒　瀧　美　香：芥川龍之介「偸盗」とプロスペル・メリメ「カルメン」の男が女を殺すことの持つ意味の違いについて
竹　林　　謙：星新一『ノックの音が』における「人物」、「場面」、「展開」とその「ノックの役割」及び読者への印象について
蓑　口　晴　紀：堀辰雄『風立ちぬ』を読んで死を核とした「生の果実」
三　好　野百合：三浦綾子の『塩狩峠』における死生観について
山　田　浩　平：森鴎外『文づかひ』における物語世界から見る「イイダ姫」の運命について
内　藤　夏　樹：映画と原作の比較―浅田次郎と『地下鉄に乗って』について―

・指導教員　小野寺静子

坂　井　亜　希：「東国民」を読み解く―東歌から―
鈴　木　春　介：遊宴の花
中　井　晴　章：日並皇子挽歌を読む―人麻呂が作る宮廷挽歌の世界―
波田野　美　紀：草花に寄せる万葉歌人の想い
楠　　政　諭：大津皇子とその周囲の人物との関わりから見る生涯
丹　治　和　哲：大伴家持と防人
吉　田　　徹：『古事記』天孫降臨伝説における地域の特色―宮崎県西臼杵郡高千穂町の見聞録―

・指導教員　田中　綾

石　井　僚　一：物語を創る読者と現実を語る作者―舞城王太郎『好き好き大好き超愛してる。』論―
礒　村　純　子：「孤独」と「愛」の先に待つもの―『草の花』における「愛すること」の敗北―
今　村　　真：創作　小説『嘘と摂理と』
祝　田　　知：浅見光彦はなぜ今日の人気を得るに至ったか―「坊っちゃん探偵」がモテる理由―
佐々木　　朋：『片腕』―モノから読み取る作品舞台―
佐々木　真　美：『戯言シリーズ』における〈妹〉の存在意義―セリフもなければ、イラストにもならない〈妹〉とは？―
鈴　木　陽　子：風流踊り―民俗芸能から―
高　橋　紗　姫：転校生のアクティングエリア―恩田陸の「演劇」とは―
竹　原　　翼：『海辺のカフカ』―異界と音楽―
田　湯　俊　彦：『家畜人ヤプー』から読み取る「白人崇拝（アルビニスム）」―沼正三作品における黄色人の劣等感や白人西洋先進国に対するコンプレックス―
中　　聡太郎：栄光と哀愁の南米移民航路―『蒼氓』のあとさき―
中　村　和　樹：創作　小説『ツインズバインド』
平　岡　　素：瀬尾まいこ作品における「家族」のつながり―『卵の緒』から『幸福な食卓』まで―
和　田　楓　子：『富嶽百景・走れメロス　他八篇』にみる太宰作品―井伏鱒二の編む太宰治―
佐々木　亜沙美：創作　小説『OHANA』
神　　愛　雅：森見登美彦『恋文の技術』論―『漱石書簡集』との比較を通じて―
田　口　もえみ：太宰治『グッド・バイ』考察と創作
永　野　美由紀：創作　小説『姫林檎』
山　田　隆　之：創作　小説『堕ちる』
武　田　和　也：創作　小説『さくらたち』

石　川　大　介：室生犀星『蝶』論―その美とリアリティの狭間―

・指導教員　追塩千尋

秋　保　恵実子：先導の神猿田彦の背景に見られる民族的性格―伊勢における朱・水銀を通しての交流・交易ネットワークや考古学における伊勢湾周辺の土器に見られる交流範囲―
今　井　菜津子：天狗とは何か
江　戸　友　樹：鳥霊信仰から見るヤタガラス
柿　下　省　吾：日本人の宗教的特性に関する考察―小泉八雲とニコライ・カサートキンの目を通じて―
川　北　圭　佑：建速須佐之男命の性格
菅　原　隆　道：人々にとっての鬼―『今昔物語集』を中心に―
田　井　宏　典：常世について―常世論の諸説とその課題を中心に―
及　川　　清：卑弥呼の実像をめぐって―『魏志倭人伝』と『記紀』との整合性からみて―

・指導教員　船岡　誠

江　口　琢　哉：「鎌倉幕府」とその実像
太　田　愛里沙：宮本武蔵の剣術
加　藤　大　空：源頼朝の人物像
加　藤　真　奈：江戸の教育観―貝原益軒を中心に―
工　藤　貴　昭：武士道と五輪書
坂　本　康　晴：日本人の肉食文化
佐　藤　昌　吾：江戸時代の日本医学の変遷―漢方医学と西洋医学の出会い―
髙　橋　ゆ　か：服部半蔵の史実
田　中　友　香：生類憐みの令は悪法か？
成　田　ちひろ：新選組イメージの変遷
日　隈　友　香：細川ガラシャ
松　橋　史　展：日本霊異記における地獄の思想
三　橋　　茜：歴代会長から見る創価学会
片　野　朋　美：神仏習合と日本人の宗教観
長　内　謙　太：白隠禅師について
釜　屋　和　也：人間と妖怪

〈英米文化学科〉

・指導教員　池内靜司

池　端　那　美：『マクベス』から見る人間観
恵　美　功太郎：ハムレットとメランコリー
木　村　真　美：父権制社会とシェイクスピア作品の女性たち
佐　藤　まり子：シェイクスピアと宗教
千　葉　豪　毅：シェイクスピアの悲劇『リア王』とその時代の関係性
月　永　　渉：作品『マクベス』の成功についての考察～登場人物の言動から～
広　島　悠　樹：戯曲『ロミオとジュリエット』はなぜ面白いのか
藤　田　亜侑美：『ロミオとジュリエット』に登場する植物と香り
前　田　美　香：『ロミオとジュリエット』における結婚観とその時代背景
松　井　静　香：エリザベス朝演劇『ハムレット』
松　岡　亜　季：シェイクスピア時代の演劇の環境
本　山　彩友美：『ハムレット』に見る近世ヨーロッパの人生観

・指導教員　井上真蔵

伊　藤　美　咲：北欧福祉と日本福祉
上　野　紗　綾：サマンサタバサと寺田和正
大　沼　萬里子：津田梅子とアメリカ―アメリカ留学とその影響―
大　橋　諒　子：夏目金之助とロンドン
坂　井　優　介：トヨタリコール問題に見る異文化理解
榊　原　あずは：森英恵―「マダム・バタフライ」世界への挑戦―
佐　藤　鈴　花：オノ・ヨーコ―ジョンに最も影響を与えた女性―
佐　藤　真希子：孫正義の成功―文化を乗り越えて―
澤　谷　　遥：NOBU STYLE―日本料理を世界に広めた男、松久信幸―
原　　ゆりか：スターバックスという企業の精神
北　條　佑　奈：ベルリッツ CEO 内永ゆか子―その行動と軌跡―
馬　淵　ちひろ：ペリー来航とその影響

・指導教員　岩崎まさみ

桶　屋　愛　未：クール・ジャパンと呼ばれる現代文化「Anime」
櫛　引　優　那：山ガール―現代の女の子の求める環境と推移―
斉　藤　詩　帆：世界で最も知られるアメリカ人ウォルト・ディズニー
鈴　木　美　緒：変わりゆくフラ文化と今後の認識
外　山　　由：人はなぜ夢をみるのか
中　川　智　美：アーミッシュから学ぶ平和―赦しと報復について考える―
中　島　詩　菜：ペットの家族化
藤　林　剛　士：北方領土における先住民族の存在
河　田　純　貴：ガンダム人気の秘訣とニュータイプによる人の革新
駒　木　　佑：いじめ問題に表れる日本文化―集団と関係性―
田　中　佑　基：北見と薄荷

堀　内　啓　太：韓国から来た韓国人と、日本にいる韓国朝鮮人
澤　田　真理恵：観光都市札幌
伊　藤　亜　美：イヌイットの壁掛けから見るイヌイット文化と歴史
中　江　優　介：ニュージーランド旅行記

・指導教員　上杉　忍

大　島　直　樹：ハリウッドにおける赤狩り―恐怖政治に支配されたアメリカ映画界
可　香　拓　哉：ベースボール世界一周ツアーに見た 1890 年代のアメリカ
金　子　賢　士：ジャマイカ･クレオール言語「パトワ」
菊　池　郁　葉：脱工業化後のアメリカ監獄と犠牲となる有色人種・貧困層
倉　澤　優　歌：ニューネザーランドの黒人の歴史
館　　雄　樹：日米地位協定と沖縄における米軍事件・事故
中　本　宏次郎：アメリカでのサッカー人気について
貫　田　　彬：アメリカ、ユダヤ、イスラエル三者の関係について―ユダヤ人の来歴を踏まえて
原　　大　樹：黒人たちの「挑戦」―南北戦争と奴隷解放宣言の真相について―
宮　川　菜　奈：Ella Baker の公民権運動における役割と貢献―SNCC との活動を通して―
渡　邊　知　子：メキシコ系アメリカ人の生活環境の変化―1986 年移民法制定から現在まで―
池　川　洋　一：サン＝ドマングの奴隷反乱とアメリカの関係
丹伊田　晋　也：広島、長崎への原爆投下とその背景
久　保　侑　也：黒人奴隷解放の父フレデリック・ダグラス
鶴　田　英　也：アメリカ合衆国における監獄―日本、ヨーロッパ監獄との相違点―
中　村　　翔：ファッションにおける腕時計

・指導教員　川上武志

阿　部　千保理：*Charlie and the Chocolate Factory*―人間の中にあらわれる欲―
阿　部　裕　朗：*The Road* by Cormac McCarthy―荒廃した世界での善い者とは何なのか―
衛　藤　史　明：スティーブンキング『ショーシャンクの空に』が与えてくれる解放感
後　藤　純　美：「ネヴァーランド」～ネヴァーランドの存在する場所～
田　代　　恵：不思議の国のアリス～ファンタジー作品の黄金時代～
庭　田　美由紀：メアリー・ポピンズについて―無愛想な乳母が伝えたかったこと―
広　瀬　岳　人：*Winnie the Pooh*―全世界の子供や大人が喜ぶ脳内世界―
保　原　祐　介：ジョン・レノン～楽曲に託した思い～
百　瀬　満里奈：エマの成長―ジェーン・オースティンが伝えたかったこと―
山　崎　翔　平：*Love of Seven Dolls*―人のあるべき姿とは―
佐　藤　真　帆：*Alice's Adventures in Wonderland*―アリスになりたい子ども達―
江　澤　優香里：*DOCTOR DOLITTLE* ～登場人物から見る独特の世界観～
黒　田　亜　衣：*Alice's Adventure in Wonderland* ～この冒険がアリスにもたらしたもの～

・指導教員　竹内　潔

浅　田　彩　那：身近な生活習慣病である高血圧を考える
一法師　知　美：現代人の病気糖尿病：その治療と生活改善
只　野　あゆみ：子宮頸がんとその予防法について
百　々　翔　平：HIV 陽性者と AIDS 患者について

・指導教員　常見信代

相　原　雄　太：フットボールからサッカーへ―誕生・盛衰・進化―
及　川　　翠：ヴィクトリア女王とファッション
大　森　有未加：ドルイド～ケルト社会の権力者
岡　崎　友佳里：クリストファー・レンとロンドン再建
賈　　顔　　甄：チャールズ・スペンサー・チャップリン
金　濱　友　紀：ロンドン―買い物の歴史―
菊　地　弘　美：アーサー王物語―創り続けられたストーリー―
北　川　美　怜：アキテーヌのアリエノール
佐　藤　友　美：The Bagpipes
長　　敬　太：古代ブリテン諸島とケルト文化
平　塚　茉　美：ロールス・ロイス
八　鍬　早　姫：義賊ロビン・フッド―時代の中で人々は何を求めたのか―
横　野　有祐美：ヴィクトリア期の女性―中流階級を中心に―
安　宅　榮　治：中世イングランドの羊毛商人―ウィリアム・スタナーを中心に
栗　山　知　佳：「カンタベリー大聖堂」
川　瀬　佑太朗：歴史の中のスポーツ～イギリスを中心に～
八木橋　裕　樹：新しい機会と役割―20 世紀後半のイギリスを中心に―

・指導教員　濱　忠雄

浅野目　友　美：二人の王と「ドイツの父」プロイセン―プロイセン大国への歩み―
石　黒　美　有：ヴェルサイユ宮殿―優雅で悲惨な宮廷生活―
石　塚　槙　子：覇権国家アメリカ―ヘゲモニー獲得への道と国際社会との関わり―
川　村　春　菜：中世ヨーロッパの魔女狩り
白　石　春　菜：アフリカ系アメリカ人における人種差別―現在も続く闘い―
田　澤　あす美：ファッションの歴史―お洒落は我慢―
對　馬　有　紀：ナチス・ドイツの行った大量虐殺―ホロコーストについて―
藤　井　友　美：マリー・アントワネット―宮廷生活と革命下における王妃―
松　永　怜　依：フィンランドの教育から学ぶ―良い教育とは―

水　上　唯　衣：黒人差別からみる格差国家のアメリカ―自由と平和への長い道のり―
村　山　健　太：近代オリンピックが世界に与える影響―時代や人によって移り変わるオリンピックの在り方―
茂　木　麻　未：歴史に名を残した海賊たち
井　上　祐　子：ハイチ共和国―「楽園」とは何か―
西　井　奈都子：世界地図で見るヨーロッパ―中世から近代へ―
原　　真　琴：チャーリー・チャップリンと時代背景
古　川　え　り：モーツァルトの音楽の神秘―オペラから読み解く―
松　田　未　央：ベルリンの壁崩壊―現在から過去へ―

・指導教員　本城誠二

大　野　恵梨奈：『新・ビバリーヒルズ青春白書』に見る日本とアメリカの養子問題
小　川　麻　子：ウッドストック・フェスティバル―60 年代カウンター・カルチャーとロック―
佐々木　奈津子：『タイタニック』が大ヒットした理由
杉　村　まゆみ：POP ART ～二人の巨匠が表現したかったこと～
高　木　香也子：星の王子さまからのメッセージ
高　島　沙里美：ディズニー映画から見るアメリカ文化
似　鳥　瑞　帆：スポーツから見るアフリカ系アメリカ人―悲しい歴史と価値観―
藤　澤　舞　子：ヘイト・アシュベリーにみるヒッピー文化
保　村　梨　奈：ジャズとは、何か―ジャズの巨匠　ルイ・アームストロングの音楽から考える
吉　田　友　香：ロックの異端児・RADIOHEAD―現代ロックの中で―
和　田　　眸：黒人大統領誕生の秘密
井　田　香奈子："Women's Liberation" 解放されたアメリカ女性たち

・指導教員　安酸敏眞

石　塚　絵　理：「クリスマスとは何か―歴史とその意味―」要旨
高　橋　　翔：ヒトラーの人種理論とナチスの人種政策について―歴史的背景と学問的背景を中心とした考察―
只　野　杏　奈：ヨーロッパ社会に見る蛇の変遷
田　中　智　佳：神話に見る世界樹と樹木崇拝
千　葉　絵　尋：翻訳と註釈："Hegel and the German Ideology," in *Understanding Europe*, by Christopher Dawson (Catholic University of America Press, 2009), pp.151-164
橋　本　明日香：フロイトの夢判断
蜂　谷　麻　衣：ギリシア神話と聖書神話―神観念と人間観の比較―
平　塚　梨　奈：秘密結社フリーメイソンの謎とその姿
広　田　愛　佳：「ギリシア神話」
森　　裕　太：パンドラの匣
山　崎　宗　洋：『ナルニア国物語』に見るファンタジー
白　橋　政　記：サー・アーサー・コナン・ドイルとシャーロック・ホームズ
渡　部　義　也：アナバプテストの洗礼論
村　松　七　海：星座と神話
吉　田　浩　規：天使と悪魔

・指導教員　米坂スザンヌ

海老名　理　佐：Foreign Language Anxiety
太　田　美　緒：Honorifics for Japanese Language Learners
藤　田　　茜：Universals and Culture in Direct and Indirect Communication
宿　村　友　美：Japanese → English Machine Translation
阿　部　真　南：Immersion Programs
岡　戸　友　樹：African American Vernacular English
木　村　友季恵：How to be a Good Language Learner: Speaking and Learning by One's Self
篠　原　彩　乃：Vocabulary Selection for Junior High School Students
住　谷　祐　佳：Language Learning Motivation
七　尾　絵玲奈：Rhetorical Devices in Advertising Copywriting
名　波　詩　織：Using English Newspapers in High School Classrooms
萩　原　翔　隼：Latin: Still Alive in English
渡　部　陽　介：Language Learning Strategies for English Grammar
石　原　加　奈：The History of Australian English Pronunciation
金　内　好　美：Politeness and Hospitality
茶　谷　堅志朗：Transfer
工　藤　裕　太：English as a Global Language: English for Asian People
堺　田　真　隆：New Zealand English
佐々木　佳　納：The Etymology of English Terms of Tourism
澤　井　一　輝：English Games and Play for Teaching Children English
対　馬　亜里紗："Listening Only" Teaching Materials

表紙「斷熊牙」図
彩色、26.5×38cm（間宮林蔵口述・村上貞助編輯筆録『東韃圖記』坤所収　北駕文庫所蔵）

間宮林蔵（安永9［1790］－天保15［1844］）は江戸後期の蝦夷地探検家、測量家として名高い。北蝦夷地（樺太）探索の幕命を受け、文化5（1808）年から翌年にかけて、東海岸は北知床岬まで、また西海岸は北上して間宮海峡を確認、更に北端近くまで踏査した。『東韃圖記』は、林蔵がこの探査に基づき、地名、地勢、産物、樺太アイヌやオロッコ、スメレンクルの風俗・習慣等について詳述したものに、林蔵の師村上島之丞の養子・松前奉行配下村上貞助（秦貞廉）が挿画を加え編輯したものである。

北駕文庫所蔵の乾坤二巻は貞助自筆本との推定もあり、『北夷分界餘話』と題して、文化8（1811）年に幕府へ献上された貞助自筆本（国立公文書館内閣文庫所蔵）に、文章・挿画共極めて近い貴重書である。本書と同名の写本の存在は知られていないが、安政2（1855）年刊の流布本『北蝦夷圖説』を始めとして多くの伝写本がある。

この図は『東韃圖記』坤巻の「禮部　冠婚葬祭」に収められている。熊祭（熊送り）の儀礼は、北海道、樺太（サハリン）、ユーラシア内陸狩猟民族に広く見られており、アイヌの「イオマンテ」が良く知られている。神々の国から遣わされた仔熊を大切に数年間飼育した後、殺して祭壇を設え歓待の円舞・供え物を捧げて、その魂を神々の国へ送り返す祭礼である。「此島も亦蝦夷島の如く熊祭をなし其行事大抵異状ある事なし。唯熊を養ふ事凡二三年［蝦夷地1～2年］に至り、漸長にして其事を行ふ故に、其熊牢を破り人を咬む事有らん事を恐れ、其歯牙を斷去る」とある。縄弭や縄・竿等を用いて牢中の熊の自由を奪った上で牢蓋を開け四足を縛り上げ牢外に出し「斷器は小刀の刃に刻痕をなし鋸のごとくなる者にして夷の自製するところなり」という。「祭時の殺法蝦夷島木を以て壓殺し此島は射殺を法とす」という対比が興味深い。　（北駕文庫　佐々木光子記）

編集後記

東日本大震災から一年半近くが過ぎました。明るいニュースがいかに貴重なものかを実感することの多い日々でした。さて、第37号も無事に発行の運びとなりました。皆様のご協力に感謝しつつお届けいたします。　（池内　靜司）

今年度、新編集委員として加わりましたが、池内先生が取りまとめてくださいました。今年から教務日程が拡大し、例年以上に忙しく感じられます。原稿を書いていただいた先生方、学生、院生の皆さんに感謝いたします。後期も頑張りましょう。　（中川かず子）

人文フォーラム37：2012年8月3日発行　編集人：池内　靜司、中川かず子　発行人：安酸　敏眞
発行：北海学園大学人文学部（札幌市豊平区旭町4丁目1-40　TEL 011-841-1161）　印刷：㈱アイワード